広報

みなず

2022
3
No.206

（特集）迎賓施設として建てられた臥龍山荘（がりゅうさんそう）

（特集）迎賓施設として建てられた臥龍山荘
～臥龍山荘文化体験実証事業「数寄の宴」～

臥龍山荘は、明治期に木蝋などの海外貿易で成功をおさめた新谷出身の豪商・河内寅次郎が明治30年頃、古くから「臥龍」の名で呼ばれた景勝地を購入し、千家十職の名工たちを呼び寄せて完成させた数寄屋の名建築です。

建物は、平成28年に国の重要文化財に指定され、庭園も令和３年に国の名勝に指定されています。

一方で施主の河内寅次郎は、臥龍山荘の完成後、間もなくして亡くなり、どのように使用されていたかについての記録がほとんどありませんでした。

このたび一般社団法人キタ・マネジメントが文化庁委託事業の採択を受け、臥龍山荘本来の使用方法を分析・検証した結果、おもてなしを行う迎賓施設を目的としていた意図が強いことが判明してきました。

今回の特集では、12月２日㈭に実施された河内寅次郎が実現しようとしていた臥龍山荘でのおもてなしを再現する実証事業「数寄の宴」をご紹介します。

当時の主要交通だった川船で肱川から客人をお迎え

お迎え後は、不老庵にて呈茶のおもてなし

本事業は、文化庁「ウィズコロナに対応した文化資源の高付加価値化促進事業※」の採択を受けて、一般社団法人キタ・マネジメントが実施した事業です。

※文化施設や文化資源の高付加価値化により旅行者の地域における滞在・消費の促進を図るとともに、ウィズコロナにおける文化観光推進に係るモデルを創出し、「文化振興・観光振興・地域活性化」の好循環を創出することを目的としています。（文化庁ホームページより抜粋）

不老庵でのおもてなしに続いて臥龍院（がりゅういん）へご案内

臥龍院「壱是（いっし）の間」での宴席

紅葉の宴

臥龍院では、能などの古典芸能を客人とともに、主人も楽しもうとしたと考えられます。今回の実証事業では、観世流能楽師の川口晃平さん、人間国宝で能楽大倉流小鼓方の大倉源次郎さんらをお招きして、壱是の間で初めてとなる能楽が披露されました。

観世流能楽師　川口晃平さん

能楽大倉流小鼓方（人間国宝）大倉源次郎さん

【臥龍院 壱是の間】

この部屋は能舞台としても設計されていたようで、床下には音響をよくするために備前焼の壺が埋め込まれている。畳を上げると舞台になるとされていたが、改修のときに見ると畳の下は引いたままの板だった。能舞台の床面は、摺り足による歩みや舞の演技に適するよう滑らかに削った檜の厚板を用いるものなので、五十六歳で急死するように亡くなった寅次郎が、あとでやろうとそのままにしておいたのが、ついに未完成となってしまったのかもしれない。寅次郎亡き後、ここで謡いの会は催されたが、能が開催されなかったのはそういう理由だったことも考えられる。それでも鼓や笛の音はさぞかし美しく響いたことだろう。

引用：「水郷の数寄屋　臥龍山荘」（平成24年大洲市発行）39-40ページより

夕月の宴

夜の上演では、奏でた鼓や笛の美しい音色が肱川を越えて、冨士山をはじめとした周囲の山々に反響し、さらに幻想的な雰囲気を醸し出していました。

地域の特性を生かしたまちづくりを考える

～臥龍山荘文化体験シンポジウムより～

臥龍山荘ウェブサイトで ⇒
シンポジウムを視聴できます

臥龍山荘の歴史的背景や文化的価値、瀬戸内や肱川流域の地域性などを生かしたまちづくりの可能性について考えるシンポジウム（主催：一般社団法人キタ・マネジメント）が12月19日㈰に大洲市民会館で開催されました。

陣内秀信さんと隈研吾さんの基調講演に続いて、木村宗慎さんをモデレーターに「地域文化と観光まちづくり」をテーマにしたパネルディスカッションが行われました。登壇者のみなさんから頂いた提言などについてご紹介します。（本文中の敬称略）

木村（きむら） 宗慎（そうしん）さん
茶人・芳心会主宰（愛媛県出身）
茶の湯を軸に執筆活動や展覧会などの監修も手がける

陣内（じんない） 秀信（ひでのぶ）さん
法政大学特任教授
専門：イタリア建築史・都市史

【木村】臥龍山荘の実証実験として能楽師に来てもらって上演していただいた。その時に初めて気づく驚きがあった。臥龍山荘単体で見られることが多いが、向かい側の蓬莱山（ほうらいさん）との関係性が本当に大事で、一番驚いたのは、お囃子（はやし）を奏でたら肱川を越えて向かい側の冨士山と反響してこだまのように音が返ってくること。こうしたことまで考えて建てられていたのかということも驚きであり、実際に臥龍院の建物の中だけでなく、蓬莱山の方から演奏することも可能なのではないかなど、使ってみて初めて気づくことが多かった。そうした視点でいろんなものをニュートラルに見ていくことでさまざまな可能性が拓けていくと思う。力づくでものごとを支配して作り替えるのではなく、いろんなものと一緒に生きていくという答えが大洲から発信できるのではないかと思っている。これから大洲の町の文化財を生かしたり、地域の特性を生かしたまちづくりを行う際にどこに注力するべきかについてご意見をいただければと思う。

【陣内】町には、子育てするのに良いとか、路上で子供たちが元気に遊んだり、人々が集い交流するシーンが自然な形であちこちで見られたりするような住民の生活の場としての価値が大事である。

ヴェネツィアの人は、家に住むだけではなく、町に住む感覚を持っている。町に住むのが楽しい、家から出たら人と出会えて、広場に行くとお金を使わなくても長く居られる。カフェやギャラリー、自転車も使えて、人と出会えるドラマが毎日あるのが当たり前の都市の姿があった。

車の時代、個人主義になってバラバラになり、郊外の方に目が向かい、町の総合性や複合性がどんどん薄れていったのが日本である。それを取り戻そうとする復元力が今まで働いてこなかった。コンパクトシティや都心部に店舗を置いたりすることを応援するような制度があるかもしれないが、大洲はそれを目指すべきではないかと思う。大洲には、すてきな都心部がある。

道路標示を見ていたら「Central Ozu（セントラル オオズ：旧市街）」と出ていた。城下町は一つのブランド化した言い方としては良いと思うが、もう少し現代の歴史的な空間や魅力ある生活空間が観光情報・文化発信力でも重要であり、そういった求心力が町をもう一度作り直すことにつながる。保存という言い方をするとちょっと足を引っ張ってしまうようなイメージがあるかもしれないが、イタリアでは保存という言葉を使わない。「リクーペロ（甦えらせる）」という言葉を使っている。既存の建物を壊すのではなくて、その空間の構成や面白さを十分尊重しながら、そこに新しい機能や意味を加えて人々が良い感じで使う。街路をもう少し歩きやすくしたり、もう少し人が交流できる場を作り出す。そういうことが文化観光と連動してくる。

子供たちや若い人、お年寄りも路上で楽しんでいる姿が重要であり、大洲では子供たちが挨拶をしてくれる、これが良い。みんなが集まる場所ができればと思う。

【隈】大洲はすでにブランドになれる可能性を持っている感じがした。臥龍山荘というコアがあり、地域のまとまりが歩ける距離にあって良いスケール感がある。川と山とで領域がはっきりしていて、場所自身がブランドになれる要素を持っている。そこからブランドを使って何ができるかと言われたときにネタはいろいろある。例えば、今、木蝋がレストラン業界に注目されている。洋蝋燭は匂いが料理に影響を与えるので、最高級のレストランは木蝋を使うというような話もある。世界的に注目されている可能性を伸ばすこと、その素材も数多くある。そういうものを使って臥龍山荘というコアがあることをうまく使えば世界ブランドになり得ると思う。

【木村】大洲地域では昔からシルクもすごく良い物がある。大洲で特別な布を作ってディスプレイに使うこともできるのではないか。

【隈】それを開発したり作ったりするために若い人が大洲に移住することが起こるのではないか。NIPPONIA　HOTELなどで観光客が来ており、それにプラスして働く人とか、住む人が出てくると思う。大洲をブランドとして世界に売っていくときに人材が必要になってくるので、それに興味を持って引っ越す人がたくさん来る可能性がある。これから観光と一緒に新しい形での製造のようなことをやっていくと良いと感じた。

隈（くま）　研吾（けんご） さん
建築家
東京大学特別教授・名誉教授

【矢ケ崎】各地域に固有の建築文化があるが、これまでそれを正当に評価してこなかった。評価できる人がいなかった。数寄屋や茶室となると京都の建築をまず思い浮かべて、その人が評価軸になってしまっていた。その時代の人たちが臥龍山荘を見て「これが茶室です」と言われたら「これが茶室なの、全然違う」と言われて終わりだったかもしれない。それを黒川紀章（きしょう）先生がいち早く発見されたのは先見の明があると思う。世界的な視野で見たらいろいろな建築がある中の一つに大洲の臥龍山荘があるという評価軸を我々は持たないといけない。これから臥龍山荘を生かしていくために、まずは地元の人に自信を持っていただきたい。世界に誇れる建築だというお墨付きをいただいている。日本にめったにない数寄屋の建築で、これこそ数寄屋の原点なんだということがはっきり言えることに自信をもって大いに発信していただきたい。

矢ケ崎（やがさき）　善太郎（ぜんたろう） さん
大阪電気通信大学教授
専門：日本建築史、庭園史

【他力野】臥龍山荘を保存して地域の宝として残していく、そして地域を表現していくためにどう活用するかを考えていくことは、それ以外の中心となる地区においても何を残して何を変えるのかを考え、この町がずっと必要とされ続けて、時代を超えて人々の暮らしが続いていくためにどうするのかを考えていくことでもある。文化観光を通じて人々が住み続けていける町がどうなっていくのか、大洲が守ってきた今も息づく歴史的資源と向き合いながら、一回無くしてしまうと取り戻せないので、これを残しながら時代に必要とされ続けられるあり方を改めて考えなければならない。

提言いただいたような事例が大洲の中で展開できれば、新たな人、若い人がどんどん集ってくることにつながっていくと思う。若い事業者が入ってきている今の状況が続くように、そして大洲がブランドになる可能性があるという話をいただいたので、その一部を担っている立場としてみなさんと共に大洲がブランドになるべく事業を進めていきたい。

他力野（たりきの）　淳（じゅん） さん
バリューマネジメント㈱代表取締役
NIPPONIA HOTEL 大洲城下町を運営

【木村】実証実験に来た能楽師が次のメッセージをインスタグラムにあげている。

「昼の部は外光が夢のように心地よく、夜は燈明が錦糸を照らし、舞っていても、ものすごい風情を感じました。大洲の町は放置されつつある古民家を再生させ宿泊施設とすることで使いながら景観を守り、シンボルとなる大洲城も伝統工法、しかもすべて国産材で復元したという気合の入りようで、僕はこの町に開発しまくり、家を建てまくれば経済が発展して国が富むという現代日本に未だにその足を引っ張る超時代遅れの思想に対して、ついに日本が巻き返しをはじめたその切っ先をみます。」

身の回りにあるものの価値をもう一度信じて、それを大切に再生させてほしいという我々からのメッセージとして受け取ってほしい。